少しズレた告白の仕方

零・ZA・音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
少しズレた告白の仕方

【Ｎコード】
Ｎ０６９５Ｂ

【作者名】
零・ＺＡ・音

【あらすじ】
文化祭まで後一週間。なのに、クラスの出し物に使う看板はまったく出来ていなかった。呆然としている俺の耳にあいつの声が聞こえてきた。

赤い空は今の俺の心と同じ色だ……。
窓の外を眺めて物思いに耽るが、現実を変えるだけの力は持っていなかった。風に吹かれて飛んでいく一枚の紙。
ふわりと舞って、床へと落ちていく。それを拾い上げて俺の元へと持ってきて、微笑んでいるこいつは、あの時言った約束は守っている。だけど、これを俺にどうしろと言うんだよ。目の前で微笑む顔は、満足げで嬉しそうだ。
だが、反対に俺の気分は最高潮に恥ずかしい。渡された紙をもう一度見るが、ドキドキして上手く見れない。
どうしてあの時、俺はオッケーしたのか今頃になって失敗だったという事に気付いていた。
こうなった事の発端は、五日前に遡る――。

「ここにいたのですか。探しましたよ」
扉が開く音がして声の方を向くと、朱に染まった空がその人物の姿を影に変えている。
顔がまったく見えないが、この喋り方にこの声は間違いなくあいつだろう。
「……あぁ、なんか用か？　凛」
「用がないと来たらいけなんですか？　章仁さん」
ゆっくりと優雅に近づいて来るその足音が俺の前で止まり、こちらを見下ろしてにっこりと微笑んでいた。
開け放った窓から吹き込む秋の風は、俺の頬を撫でて凛の髪を揺らす。
長く綺麗な髪が一本一本が風を纏い、赤い光をキラキラとうけて輝いて見える。不覚にもその姿を見てドキッとしてしまった。

「べ、べつにそう言う訳ではないが……」
おっとりした口調ながら、中々ズバッとものを言う奴だよ……このお嬢さんは。
こいつは、クラスメイトの三嶋凛（みしま りん）。ちょっと変わった――いや、かなり変わったお嬢様だ。
お嬢様と言っても、お金持ちではない。その綺麗な顔立ちと清楚な雰囲気からそう呼ばれているのだ。
学校では、知らぬ者はいないと言われている有名人で、しかも俺も込みでの有名人。しかし、いい意味ではなく変わり者で有名なのだ。少しずれた発想と天然ボケの持ち主でいつも廻りにちょっとした迷惑をかけている。でも、それが可愛いと男子の間では評判で、ファンクラブまである始末。
俺も可愛いと思う訳だが、お願いだから俺を変な道に引っ張りこむのは、やめてくれ。普通に接してくれたらどんなに嬉しい事か。でも、普通が出来ない子なんだよね、この子は……。
「ならいいですよね。と言っても、私も一応は用はありますよ」
何がいいのか、さっぱり分からないがこう言う物言いでも、嫌味に聞こえないのが不思議だ。
「それで――出来ましたか？」
両手を広げて首を振っている俺を呆れた様子で見ている凛だが、なんだか楽しそうだ。
俺が苦しんでいるのがそんなに楽しいのかね？　いい趣味してるよ。
「あと、一週間ちょっとですよ？　文化祭」
あくまで他人事のように言い放つ凛だが、こいつも俺と同じ担当のはず。
今、この学校では文化祭の準備の為に毎日放課後はとても賑やかで、あちらこちらから聞こえる声は笑い声から怒鳴り声まで様々。それでも、みんなが一丸となって取り組んでいる姿は美しいものだが――。

「分かってるよ。と言うか、凛――お前も俺と同じ看板担当だろう？　手伝えよ」
「私は看板と衣装の担当です。今は衣装の最終打ち合わせが忙しいんですよ」
「あのなぁ……俺一人でどうしろって言うんだよ。――これを」
「最初は一緒に手伝っていたのですから、文句は言わないで下さい」
俺が指差すと、それを覗き込むように前屈みになり、しゃがみ込んでくる。
ちょっと覗き見える胸元にドキドキしてしまうが、一つ一つの動作がとても優雅で見ていてホレボレとしてしまう。
こう言うのを”大和撫子”と言うのか知れないが、凛の場合は――。
「ドキドキしないですか？」
「……何が？」
「お色気作戦……失敗」
このズレた発想と行動が無ければの話だけど……。
こいつの伝説は、色々と在りすぎてここでは全てを語り尽くせない。とりあえず、飲み物と食べ物を用意してソファに腰掛けてゆっくりすれば、六時間以上は喋れる自信がある。それぐらい、俺はこいつの伝説の片棒を担がされているわけだ。『凛の姿あるところに、章仁あり』とまで言われているくらいだから、凛とは最早ワンセット扱い。俺達って、一体なんだろうな……。
「デザイン画はあるのですから、出来るんじゃないんですか？」
「いや……あのなぁ」
俺が指差しているのは、看板のデザイン図。
Ａ４の用紙にカラフルな文字と奇抜な絵が描かれている。これが俺達のクラスでやる喫茶店の看板か、と思うと涙が出そうだ。どうみても悪趣味な夜の店の看板だ。どこの世界に『喫茶・幻慈蛍』って、場末のスナックみたいな名前を文化祭でつける奴がいるんだよ。しかも、普通に読めないだろうって……これ。誰がこれを「げんじ

ぼたる」って読めるのか、教えて欲しいぞ。
「まぁ――素敵な名前ですね」
「あのなぁ。……やっぱ、お前すげぇわ」
「何がですか？」
「いや、別に」
これを見て素敵な名前って言える、お前のセンスの方がすごい。
これをデザインした奴が「幻を慈しむ蛍」って言ってたけど、意味が分からなかった。
決して、これは俺が描いた訳ではないぞ？
このデザイン画はクラスメイトが喜んで描いたもので、俺はデザイン画を元に看板を作成する担当と言う訳だが――俺一人で何が出来るよ？
大体、看板作りに担当二人ってどういう事だよ？　クラスに何人いると思ってんだよ……四十人だぞ？
それぞれの担当を普通に分担しても、五人は集まるはず。それが何故にたった二人で看板を作らないといけないんだ。……しかも、一人はまったく手伝わない、と来たもんだ。
どうして皆は誰も手伝ってくれないんだよ！　そんなに薄情なクラスだったのか、俺達のクラスメイト達は！
「冷やかしなら帰ってくれよ」
「酷い言い方ですね。手伝いに来たんですよ、今日は」
少し頬を膨らませている凛は、立ち上がって近くにある机の上に鞄を置いてから、また俺の隣に腰掛けている。
「お前が……？」
「そうですよ。何か不満でも？」
俺が座っているのは、教室の床の上。空教室なので机は後ろに全て並べられている。
それなりに掃除は行きとどいているが、床は少しホコリっぽい気もするので別に同じようにしなくてもいいのに、なんて律儀な奴だよ。

「制服、汚れるぞ？」
「いいですよ。それなら、章仁さんも同じでしょ？」
「そうだけど……」
「そうですよ。別に二人っきりですから、気にしません」
普通、女の子は汚れるのが嫌で直には座らないだろうが、凛はまったく気にする事もなく座っている。
本当に変わっている奴だ。でも、こんなところが男女問わず、人気がある秘密なんだろうな。しかし、最後の言葉はどういう意味だ。二人っきりだから気にしないってなんだ？
――それよりも近すぎだ。
そんなに俺のそばに座るなよ。ちょっと恥ずかしいし、それに動き難いだろうって。
「それでは、どれからいきますか？」
「どれからもないだろ……。まったく出来てないんだからよ」
「本当ですね。綺麗な色したベニアの板ですね」
「嫌味か……それ」
俺達が座っている前には、大きなベニア板が一枚。
1メートル四方の大きさで綺麗に木の色をしている。そして、この上に白い紙を張ってそれに描いて行くんだが、それすら張ってない状態。つまり、何も進んでいない。下書きすら出来ていない状態なのだ。さすがにこれはまずいと、ずっと悩んでいる訳だが――。
「それでは、まずは下書きからしましょう。それをしないと進みませんよ？」
「そうしたいのは、山々なんだが……ほら」
「なんですか？　……ん？　これって、空白ですか？」
首を傾げながら見ている凛が、俺の持っているデザイン画から顔を上げて言うので俺は頷いていた。
「章仁さん……近いですよ。もう」
「それは、お前が近づき過ぎなんだよ……凛」
吐息がかかるくらいの距離で恥ずかしがる凛の瞳に、吸い込まれ

そうになってしまった。
だったら、そんなに近づくなよ。
それにいちいち顔を赤くするんじゃないよ。近づいてきているのは、お前の方だ。俺は一歩も動いてないし、身体も動かしてない。
お前の髪からシャンプーのいい香りが漂ってきて、俺も平常心保つのに大変なんだぞ。
俺をなんだと思っているんだよ……これでも、男だぞ？　人畜無害のヘタレ野郎ではないんだぞ。
時には、狼になったりするんだからな。
「これを描いた奴が、『あれは気に入らないから、少し変更したい』って、言い出したんだよ」
「それでは、何も出来ませんね」
「あぁ……普通、描くなら中心からだろ？　端から描くとバランスが悪くなるし、おかしいだろ」
デザイン画の中央には、くり抜かれたように真っ白な部分がある。
その真ん中には以前は蛍の絵があった訳だが、これを描いたクラスメイトが気に入らないと言い出して結果、中央のみ仕上がり待ち。
それ以外の部分はほぼ決定らしいので描けと言われれば描けるが、それだと中央にどんなのがくるか分からないので、バランスが悪くなってしまう。只でさえ、このデザインは左右対称のようになっているので、中央にくる絵によっては尚更バランスが悪くなるだろう。
つまり、この状態で描くのはお手上げ。これが俺の一番の悩みであるという事だ。
「それでは、どうするんですか？」
「デザインが上がるまで待つしかないだろうな。今は何にもできないって事だ」
ため息混じりに言って、立ち上がり背伸びをすると、とても小気味良い音がなっている。
同じ格好をずっとしていた訳だから、身体もこるというものだ。
俺、歳なのかな……。

「それは困りましたわね。そうだ――それでは、こうしましょう」
「なんだよ……」
何を閃いたのか、俺を見て微笑んでいる凛は楽しそうだ。一体、今度は何を思いついたんだよ。
頼むから、変な事言うなよ？　俺にまで迷惑がかかってくるんだからな。これ以上、変なのはごめんだ。
「私達でデザインを決めましょう。それなら、問題ないでしょう」
「は……？」
至極まじめに、さも当然のように言い放つ奴だな。人差し指立てて、笑顔で言わなくてもいいだろう。
それは俺も考えた事があるが、それでは今デザインを考えている奴の立場ってものがない。
「それじゃ、あいつはどうするんだよ。必死に考えてるはずだぞ？」
「私から言っておきますので、それでいいでしょう？」
有無を言わせず即決で決めてしまっている凛に、首を立て以外に振れなかった。
「それで、何かいい案はあるのか？」
「はい。私にとても素敵な案があります。どんな鈍感な人でも気付いてくれますよ」
俺を見て頬を薄く赤らめている凛は、力いっぱい頷いていた。言っている意味も行動も分からないが、相当な自信がありそうだ。しかし、なんて我がままお嬢様だよ。
……まぁ、ズレたのが出来上がらない事を、祈るだけだな。
俺もいい加減、看板を仕上げて遊びに行きたい。ここ数日ずっと遊びにも行けず悶々としていたからな。それに、このままデザイン画を待っていても、終わりそうにない。逆に間に合わなかったら、クラス中から非難の嵐をくらうのは俺――それだけは避けたいので凛の提案に怖いが渋々、了解する事にした。

そして今日、凛がデザイン画が出来上がった、と嬉しそうに持ってきた。
「それで、これを俺に描けと……？」
「そうですよ。ちゃんと描けているのですから、いいでしょう？」
いや、質問に疑問で返されて困るんだがね。しかも、半ギレで――。
紙を見ると確かにデザインは完成している。
前に描いていた奴の許可も凛がとっているので問題ない。笑顔で奴はオッケーしたらしい。だが、一つだけ問題があるとすれば、このデザイン自体だ。
「凛……お前、これ本気かよ？」
「えぇ、本気ですよ？　私が気持ちをこめて描きましたからね」
ちょっと頬が赤いと言うか、何を恥ずかしがっているんだよ。
俺の方がもっと恥ずかしいんだぞ？
これは、新手のいじめかと思ってしまうほどのもの。どこの世界に文化祭の看板に、
『章仁が大好きです。私と付き合ってください』
て、描く奴がいるんだよ。これは愛の告白？
ストレート過ぎる文面に恥ずかしいと言うのか、言葉が出ない。
直視する勇気はないがチラリとデザイン画を見てみると、全体が紫色で大きなハートマーク。
その中に先ほどの文字が大きく書かれていて、そしてその周りには小さな緑色のハートマークに翼が生えたのが、槍を持って飛び回っている。
なんて、メルヘンチックで独創的――じゃなくて、これではなんか俺の名前が晒し者の気分だぞ。
「嫌ですか？　私の気持ち……」
「え……あ、いや」

「いや……なんですか」
途端に落ち込む凛は、俯き口を押さえていた。なんで俺はこんなにうろたえているんだ？
そう言う意味で言った訳ではなくて、言葉のあやというか何と言うか、とにかくそういうことなんだよ。
「だから、違うって！　そうじゃなくてだな……」
「では……なんですか？」
さっきまでのは嘘かと思うほど、俺を見ている眼は真剣で怖い。
そんな目で俺を見るなよ。
お前の気持ちは嬉しいし、正直どうしていいのか分からないから、こんなに混乱している訳だよ。
「えっと、その……俺も、あの……」
「ハッキリ言ってください、章仁さん」
突然の事に、俺の方が驚いてしまった。いつもの凛からは想像も出来ないくらいの大きな声。
言ってから恥ずかしいのか、頬を赤くして少し俯いて俺を見ている顔はとても可愛い。
「私は、本気ですよ。今までずっと気付いて欲しく……だから、色々としました」
「あ、いや、その……だな」
「もう……章仁さん、優柔不断です。もしかして、私を焦らしてますか？」
モジモジとズレた事を話す凛は、俺を見ては眼を逸らしてまた見てはと落ち着きがなく挙動不審。
今回はいつものズレた行動ではなく、どうやら本当のようだ。
さすがに冗談でこういう事はしないと思うと言うか、思いたい。
しかし、デザイン画にコレを書くあたりでズレてはいると思うけど、追求はしない事にしよう。
「分かりました。それでは、こうしましょう――」
「は……？」

凛が提案してきた内容に俺は言葉を失った。しかし、凛はごく当たり前のように俺を見て微笑んでいる。
やっぱり、ズレた奴だ。
こんな発想が出てくるあたり、常人とは違う世界に住んでいるんだな。
「返事待ってます。章仁さん……大好きです」
「っ！」
俯き加減に頬を染めて、微笑みながら教室を出て行く凛を俺はただ見送っていた。

「どうしたらいいんだよ……まったく」
床の寝転び大の字になって叫びたかったが、そんな事をすれば制服が汚れてしまう。
そう考えるあたり、まだ冷静な思考回路は残っているようだ。さて、凛が提案した内容をもう一度確認しよう。
この文字の下に返事をください――デザイン画の文字を見ながら言った凛の瞳は本気で何も言えない雰囲気だった。
この文字と言うは、『章仁が大好きです。私と付き合ってください』の部分。つまり、この下に俺の返事を書けと言う事だ。なんで、もっとスマートに告白が出来ないんだよ。いや、告白自体はスマートでストレート。
男の俺でも出来ないぐらいの潔さに感服しました。しかし、これでは文化祭も何もあったもんじゃない。
完全に別物になっている気がする。デザイン画と睨めっこしても凛の告白が目に入って恥ずかしいだけ。
ある意味、拷問と一緒だ。
見えないようにと紙を裏返しにしたら、そこには何やらびっしりと書かれていた。
「なんだ……？」
Ａ４の紙一面に書かれた呪いの言葉。なんて言ったら失礼かも知

れないが、最初はそう思った。
しかし読み進めていくにしたがって、俺の顔が熱くなっていくのが分かる。
凛の奴、何を書いてんだよ。これは思いっきり恥ずかしいだろ。裏面いっぱいに書かれていたのは、俺へのラブレター。
「ははっ……あいつらしいと言えば、あいつらしい、な」
凛の気持ちが痛いほどに伝わってくる。今思えば、明らかに不自然な行動は多々あった。
何かにつけて俺を引っ張り込んではとんでもない事をする奴で、いつも先生達に怒られる。
『私は、いつも章仁さんと一緒にいたかった』
そう書かれていた文面に、凛の気持ちが溢れている。それで俺を何度も引っ張り込んでいたんだ。だけど、凛とのやり取りが楽しかったのは事実。そして、まさかこの看板担当が二人っきりになる為に凛が裏で色々と仕組んだ事とは、夢にも思わなかった。そんな事まで書かなくてもいいのに、ご丁寧に書いているあたりやっぱりズレてる気がする。
そこまでして俺と一緒にいたかったかのか？　でも、そう考えると恥ずかしいが嬉しい気持ちの方が上だ。
「俺も……いつの間にか凛の術中に、はまっていたと言う事か」
ぼやいて、自然と笑みがもれてきた。すっきりとした気持ちが、心の中に広がっていくのが分かる。
赤かった空は気付けば薄暗くなって夜の顔をしていた。
開けられた窓から入ってくる秋の涼しい風を受け、俺は紙に向かいペンを走らせた。

文化祭当日――

そして、完成した看板は、教室の入り口を飾っている。ピンク色した可愛らしい看板。

自分で言うのもなんだが、いい出来栄えだ。

悪いが色だけは、変えさせてもらった。しかし、ここに飾る前にクラスメイトに一応、お披露目したら冷やかしと嫉妬の言葉を受けて、散々遊ばれた挙句「やっとくっついたのか…」と呆れた声を誰かが呟いた事に驚いた。

俺達って、周りからそんな目で見られてたんだ。

そして、この看板を普通に表へ飾ってしまう我がクラスメイト達は、ある意味凄いと思う。

廊下を通り過ぎていく奴等からは、驚いたような声と恨みがましい声が聞え、賑やかな我が教室内は大爆笑で大騒ぎである。

こいつ等、後で絶対覚えてろよ。恨みは倍返しが俺の主義だ。

「なんだか、恥ずかしいですね」

「あのな……お前が書いたんだろうが」

「色は、違いますけどね」

頬を赤く染めている凛が、俺を見つめて微笑んでいる。呆れながらも、微笑んでしまう。

こんなのもありなんだと思ってしまうあたり、凛に染まっている証拠かも知れない。

「しかし、ここは……なんの店だよ」

「私達の愛の巣ですよ。それ以外にはありません」

「うが……恥ずかしすぎるぞ、それ」

冗談なのか本気なのか、クスクスと笑いながら言う凛に頭が痛い。

でも、楽しそうに話している凛を見ていると嬉しくなる。やっぱり、俺は凛と一緒の方がいいみたいだ。

「これ、もらって帰っていいですか？　記念に部屋に飾りたいです」

「それだけは勘弁してくれよ」

悪戯っぽく笑う凛が、俺の手を握り寄り添ってくる。この場所でそれをされるとさすがに恥ずかしいぞ。
周りには冷やかしも含めて色んな奴等がいるんだから。だけど、凛はお構いなしに看板を見つめて微笑んでいる。
そこには凛の告白があり、俺の言葉がその下に添えられている。

――凛といつまでも、どこまでも一緒にいたい。

好きだとは、書いていない。でも、伝わっているのはこの笑顔を分かる。
俺の素直な気持ちを言葉にしたらこうなっていた。
少しズレた愛の告白。
それでも、いいのかもしれない。だって、俺はこいつと一緒に入れれば、それだけでいいのだから。

「これからもずっと一緒ですよ……章仁さん」

俺の手を握る優しい温もりと共に――いつまでも、どこまでも……。

（後書き）

これは、「紙」小説用にかいたものです。
しかし、ボツにしたのですがもったいないので、書き足して投稿しました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0695b/

少しズレた告白の仕方

2010年10月8日15時50分発行